文・写真｜齋藤道子（東京都文京区立誠之小学校）

道徳

中学年｜『ないた 赤おに』

通い合う心を子ども自身が感じる道徳の授業

『ないた 赤おに』（浜田廣介）は、「信頼・友情」においてよく取り上げられる名作資料であり、これまでも様々な授業実践がなされてきた。

今回は、これまでの課題を整理し、それを踏まえた上で新たな視点から、この『ないた 赤おに』に挑戦した。

「友情」とは、「互いに通い合う心」だから…

「友情」とは、双方の心の通い合いがなければ成り立たない。この視点に立ち、「赤おに」と「青おに」に通い合う気持ちを直に子どもたちに体験させるため、以下の点を工夫した。

(1)資料提示

子ども自身が、言葉から自由に想像し、主人公の気持ちを感じ取れるように、紙芝居の枚数を4枚に絞り、さらに「おに」の表情を道徳的価値に沿ったものとした。

(2)授業形態

教室を中央から二分し、互いに向かい合わせ、それぞれの側を「赤おに」と「青おに」とした。

(3)発問

次の3つの発問により話し合いを進めた。

①立て札を壊しているときの「赤おに」と「青おに」は、それぞれどんな気持ちだったのか。

②「もっと、しっかりぶつんだい」と「青おに」が言ったとき、それぞれどんな気持ちだったのか。

③「青おに」の手紙を読んで「赤おに」はどんなことを思ったのか。また、「青おに」は、何と言いたかったのか。

主発問③においては、それぞれの立場で書いたワークシートを読み合い、それを聞いてどんな気持ちになったかを尋ねた。

(4)板書

中央に場面絵を貼り、子どもが分かれている側と同じ方に、赤と青の丸を提示してそれぞれの気持ちを書き、混乱することなく双方の気持ちがとらえられるようにした。

「互いに通い合う心」を感じた子どもたちの反応

子どもが、それぞれの立場でおにの気持ちを考えたことで、気持ちをより深く述べることができた。また、相手の気持ちを知ることにより、「赤おに」と「青おに」の心の交流を子ども自身が直に感じ取り、ペアになって読み合う場面では、自分の言葉で話し、互いに「ありがとう」と言いながら握手する姿が見られた。

また、「今日の話から、友達についてどんなことを考えたか」という問いには、「転校する前の日に、仲良しの友達とけんかをしてそのまま別れてしまった。今もずっと後悔している。僕にとって大切な友達だった。悪いことをした。今すぐにでも会いに行って謝りたい。そして、ずっと友達でいたい」と、涙ぐんで話す子もいた。

その後、次々に子どもたちが発言し、そのたびに自然と拍手が沸き起こり、なんとも言えない心温かな雰囲気が教室中に漂った。

私にとって、一生忘れられない『ないた 赤おに』の授業となった。